

集団次元のエージェンシーに着目した小規模クラス授業の展開

—— 拡張的活動を媒介する「道具」の分類の試みを中心に ——

An attempt of small class exercise focusing on group-dimensional agencies
— Classification of “tools” that mediate expansive activities —

児童学科 吉澤 一弥
Dept. of Child Studies Kazuya Yoshizawa

抄 録 活動理論では集団において参加者が行為の担い手としての能力と意思を高めることをエージェンシーと呼ぶ。とくに参加するコミュニティーの集団次元の布置や文脈の変化を起こすメカニズムの理解と方法論の確立が進んでいる。この流れは、OECD Learning Compass 2030 で掲げられた Co-Agency の考え方にも繋がると言えよう。筆者は、集団次元のエージェンシーに着目して、演習授業を行った。その際、簡易的なチェンジラボラトリー構造を作り、さまざまな媒介的道具を導入した。本稿では授業の拡張に役立った道具を網羅し、ツールと心理的ツール（記号）に区分する試みを行った。あくまで試行錯誤の段階ではあるが、分類して概観することにより、道具の複合的な働きが集団活動の文脈の変化をさせ様子を観察できたと考える。エンゲストロームは、大学生が主導的活動の中で、歴史的で個人的に差し迫った内的矛盾に直面しやすい年代であることを指摘している。これを踏まえると、集団次元での働きかけを高める潜在力をもつ媒介的道具の探求はますます重要になると思われる。

キーワード：協働的活動，文化 - 歴史的活動理論，集団次元のエージェンシー，活動を媒介する道具，心理的ツール

Abstract In activity theory, it is called an agency that a participant enhances his / her ability and will as a bearer of an action in a group. In particular, the understanding of the mechanism that causes the constellation and context change in the participating groups has progressed, and the methodology has been established. It can be inferred that this trend will lead to the idea of Co-Agency set forth in OECD Learning Compass 2030. The author focused on group-dimensional agencies and conducted exercise classes. At that time, we created a simple structure compliant with the Change Laboratory and introduced various intermediary tools. In this paper, we collected tools that helped to expand the exercise classes and tried to divide them into tools and psychological tools (symbols). Although it is only a stage of trial and error, I think that by classifying and overviewing, it was possible to observe how the complex functions of the tools changed the context of group activities. Engeström pointed out that: College students are vulnerable to the expansion of the collective dimension, as they are the ages in which they are prone to historical and personal internal contradictions in their leadership activities. Exploring the nature and function of intermediary tools will become increasingly important in the future.

Keywords: Collaborative activities, Cultural-historical activity theory, Agencies in the collective dimension, Instrument that mediate activities, Psychological tools

1. はじめに

筆者は、協働的活動が中心となるような少人数ク

ラスの演習において、授業展開のプロセスのある局面を境に、集団の雰囲気、意欲や積極性、活動のテンポと質などが一変する経験をした。こうした変化

の背景には、個人中心からクラス集団への主体の移行と活動の対象の変容のダイナミズムが生じていた¹⁾。このような活動の質的水準の移行の力動を分析するために、筆者はエンゲストロームの文化-歴史的活動理論（以下、活動理論）を援用することにする。

筆者は、形成的介入と活用した多くの媒介的道具が、集団次元におけるエージェンシーの拡張を促し、授業展開の文脈の変容（transformation）に大きな意味を持った3つの題材を提示したい。そしてヴィゴツキーが提起した媒介的道具の性質や機能を精査検討し、ツールと心理的ツール（記号）に分類する試みを行う。この意義について、エンゲストロームは媒介的道具の二つのレベル（階層的な特徴づけ）を重視していることを指摘したい。その第一のレベルは、互いに分離したツールと身ぶりによる媒介であり、第二のレベルは、対応する記号あるいは他の心理的ツールと結合したツールによる媒介であり、新しいツールの獲得と適用は、働きかけの範囲を広げていくとした。つまり新しい心理的ツールの獲得と適用（ツールと心理的ツールが互いにかみ合うとき）により、集団次元のエージェンシーにおける働きかけのレベルが高まる機会が生じる。

なお大学生の年代は学校生活における主導的活動を通して内的矛盾が顕在化しやすく、拡張的な力動が働き易いことも本研究の意義を裏づけると考える。

2. 集団次元のエージェンシーに関する研究

主体性や問題解決に関わる資質についてエージェンシー（agency）という用語が持ちいられる。本稿では個人レベルの発達や成長ではなく、集団次元におけるエージェンシーに的を絞って論を進めるが、これに関連する動きや理論のいくつかを概観する。

(1) 英国では、2000年代に入ったところから multi-agency をはじめ一元的な子ども・若者支援行政の実践が本格化し始めた³⁾。multi-agency とは、パートナーシップ（partnership）と統合（integration）によって特徴づけられる横断的な組織間協働の形態の一種を指す。その根底には教育、社会保障、健康、住宅、家族支援、臨床心理などの各専門家たちが複合的かつ有機的にかかわりあい、子どもやその家族に焦点を当てながら支援を進めることへの合意形成がある。横断的で組織的なパートナーシップが効果的に発揮されるためには、対象となる子どもや家族の包括的ニーズのための統合モデルを土台とするこ

とが不可欠とされ、この実践は地道に継続されている。このように multi-agency の理念は現場に広がりを持って定着しつつあり、以前のような分断された支援システムに後戻りするリスクは少ないと考えられている。こうした動きが実現できている背景には、切迫する子どもや家族の課題の複雑化やニーズの多様化と顕在化がある。

(2) 経済協力開発機構は、「OECD Learning Compass 2030」という学びの枠組みの中で、共同エージェンシー（Co-agency）という概念を登場させた⁴⁾。子どもたちに求められるコンピテンシー（高い成果につながる行動特性）とその育成方法についての議論を基に、教師と生徒が共に学びを創るという文脈が作られた。共同エージェンシーは、保護者、教師、コミュニティ、生徒同士との相互交流をもとにした互いに支え合う関係であり、教えと学びの過程の中で教師と生徒が協働して創っていくことと定義される。

また予測困難な時代は“vUCA”（Volatility＜激動＞、Uncertainty＜不確実＞、Complexity＜複雑＞、Ambiguity＜曖昧＞）と称されるが、共同エージェンシーが謳われたことで、協働といった集団次元が OECD において注目されたといえよう。

(3) バーンステインは、ペダゴジー（Pedagogy；教育）を「文化の生産と再生産の基底をなす実践」と定義した。例えば教師と生徒の組み合わせを、支配と被支配のコミュニケーション原理の生産、分配、再生産といった点から捉えた⁶⁾。「分類」と「枠づけ」という概念と強弱記号を用いて、ヒエラルキー構造の再分配や再文脈化を視野に入れたコードの理論を提唱した。この協働システムの考えは、集団次元のエージェンシーとして位置づけられる⁷⁾。

「見えるペダゴジー」（パフォーマンスモデル）とは、従来の学習であり、教師の意図や評価基準が見えやすい。「見えないペダゴジー」（コンピテンシモデル）とは、子ども中心主義的で、教科横断的カリキュラムや総合学習などが該当するとして対比させたが、「見えないペダゴジー」は子どもの関心や意欲を重視したものに「見えるが、実際には大人の権威性を隠蔽することで成り立っていて、かえって階級間の学力格差が拡大、再生産されていることにバーンステインは気がついた。

こうした認識を経て彼に続く世代は、第3の軸として「ラディカルな見えるペダゴジー」を考え出し、大人と子どもそれぞれの差異を可視化し架橋することで両者の関係性をより健全な形に組み換えた。

(4) エンゲストロームは、活動理論において集団次元のエージェンシーを重視している。エージェンシーとは、一般に行為の担い手(エージェント)としての能力と意志のことであり、自分たちの世界と自分自身の行動を変え、自分たち自身の活動システムを形成しようとする人々の拡張的な動きを意味する。つまり、自分たちが帰属する集団的環境や活動の未来を自分たちの手に握ることである。人々をとりまく社会的環境は、時間とともに変化するものではあるが、与えられるものではなく、人々によって作る(構成・再構成)類のものである。さらに最近では、二重刺激による形成的なエージェンシー(transformative agency by double stimulation)²⁾という発展的な概念が研究主題となっている。

(5) 山住は、生活教育運動を代表する野村芳兵衛の「本を作る教育」のカリキュラムと教育を拡張的学習の実践と位置づけた。野村は「本を読むことから、本を作ること」へ大転換を行い、学校は学習学校から作業学校へと変わった。なす(作る)ことによって学ぶ教育⁵⁾の素材となるのが「具体的な郷土の生活」である。本を作る教育には協働の精神が内在し、集団次元のエージェンシーへの拡張が顕著にみられる実践となった。

3. 小規模クラス授業の実践から

(1) 2018年度「フィールドワーク演習」
 <オープンキャンパスでの学生によるミニ・ワークショップ企画に向けて>¹⁾

15人のメンバーのクラスの授業の内、合計6回のセッション(60分~90分)を簡易的なチェンジラボラトリーの構造で毎週実施⁹⁾、実行プランとタイムスケジュールを話し合った。その頃議論されていた学科のオープンキャンパスの検討では、学生と高校生との交流が話題となっていて、筆者はこれを句のテーマとしてとらえ、FW演習の担当クラスに提案した。来場する高校生にとってオープンキャンパスの魅力を高めたいという趣旨から、「年代的に高校生に近い」、「憧れの先輩モデルである」という学

生という立場のアドバンテージが確認され、学生によるミニ・ワークショップの企画案が浮上した。この時点で、活動の機動性を確保するためにグループLINEを活用することにした。

初回セッションでは、PR用のチラシのキャッチコピーを何にするかの議論からキーワードとして「驚きと感動を」(心理的ツール)のアイデアが出された。ミニ・ワークショップのコンテンツの検討では、蛇腹(作品の外見から)の製作はどうかという具体的なアイデア(新しいモデル)が出された。蛇腹とは、正式にはアメリカの数学者が考えた「ISO AXIS」と呼ばれるものであり、平面の設計図面の山折り・谷折りに沿って折ると立体ができる。提案した学生は造形の授業で製作したことがあった。

2回目のセッションでは、実際に蛇腹製作をする場合の制約や条件が吟味された(モデルの検証とテスト)。製作時間を考慮して「ISO AXIS」の簡易版を作成した。高校生の作業時間がまちまちであることを予想して、15分を目途に標準と短時間用の2種類のパターンを用意することにした。当日の来客人数の予想に基づく準備枚数や準備時間の検討がなされた。授業協力者によるセッション全体のスケジュール表(心理的ツール)、準備に使う物品の調達の支援が活動を促進する潤滑油となった。セッションの5回目頃に高校生が大学訪問し児童学科の授業を見学したいという情報が舞い込んできて、練習のセッション(実践の場)を得たことは大変貴重であった。

二重刺激を提示したヴィゴツキーは、人間の活動における媒介的道具を、ツールと心理的ツール(記号)に区分した(ちなみにエンゲストロームは、道具にinstrumentという語を与えている)。ツールの機能は、活動の対象に対する人間の働きかけを先導する役割を果たし、対象の変化をもたらす。技術的手段が自然の過程を統制することに向けられている一方で、心理的ツールは、人の心理や行動過程を統御することに向けられている。心理的ツールは記号であり、言語、さまざまな計数システム、記憶術、代数記号のシステム、芸術作品、書字、図式、図表、地図、設計図、あらゆる種類²⁾の定式記号などのことを指し、内省的な媒介となる。筆者はこの機能の違いを軸に分類を試みた(表1)。

表1 媒介的道具と分類試案(2018年度FW演習)

道具	タイプ	意味
「驚きと感動を」のモチーフ	心理的ツール	キーワード
蛇腹のアイデア	スプリングボード	推進の決定的触媒作用
グループLINE	ツール	連絡手段
スケジュール表	心理的ツール	見通し
時間的制約	ツール	集中力
準備に使う物品の調達	ツール	支援
実践の場	心理的ツール	成功への確信
本番の離れた会場(物理的制約)	ツール	新しい活動、協働の促進
活動のテーマとしての旬の素材	ツール	歴史と文化

考察: 6回のセッションと1回の試行的実践,そして本番のオープンキャンパスでのミニ・ワークショップを通して,FW演習の活動では集団次元のエージェンシーの高まりがあったと考えられる。

FW演習の活動の対象として,「旬の素材を取り上げる」ことは,歴史的文化的な観点から眺めると現在という文脈において埋め込まれた矛盾の露呈し易さに直結する。

授業担当者のアイデアに対立する意見が出されて学生がイニシアチブを手にする局面もあった(枠組みや文脈の組み換え)。また準備段階の細目や手順の集団的合意(対象とルールの変更),全体的プロセスの中でリーダーと個々のメンバーの新たな役割の創出(分業)は,想定していなかった成果を本番で生み出した証しと解釈できる。

集団次元のエージェンシーを裏づける観察として,一体感の強まりが言語化され,個性や主張の違いが相対的に小さくなり,とるに足らないものとして感じられた現象を挙げることができる。例えば本番の来場者が予想より少なかったことにより蛇腹作りが担当できず受付に回ったメンバーから,蛇腹通りは誰が担当しても構わないという言葉が自然に発せられた。不平不満がない状況が生まれ,使命を遂行する充実感とともに自由や許容の感覚が漂っていた。

ワークショップ当日で活動が終焉してしまうことの哀惜と,半年後のインタビューにおいて喪失体験の受容と懐かしみが集団主体に対する体感として語られた。

道具という観点から特記すべきは,初回セッションで語られた蛇腹のアイデアがスプリングボードとして動きを活性化させたことである。全6回のセッションの継起において,集団次元のエージェンシーの方向を推進した原動力になったと考えられる。後日談であるが,蛇腹を提案した学生が「フラッシュモブ」というサークルに所属して,サークルのイベントでも驚きと感動を与える企画を経験していたことがわかった。初動のタイミングで出現した「驚きと感動を」というアナロジ的なモデルがスプリングボードとなったわけである。

拡張を促進する道具の本質的要素はモデルであり,モデルの助けを借りて主体は(ここでは集団主体)今回の活動の対象である生徒および保護者との交流という本質的な関係を対象化できたといえる。

活動システムは,「ルール」「コミュニティ」「分業」を社会的基盤とし,「道具」に媒介されて「対象」に向かい「成果」を生み出していく「主体」の活動である。

オープンキャンパスでの学生によるミニ・ワークショップ企画を実践した2018年度FW演習では,「主体」は個人から学生15人と授業担当者そして授業協力者から成る共通の目的をもった集団へ,「対象」は高校生への学科説明や入試対策から大学生活の実感的イメージの付与,文化の肌感覚での共有確認,見通しと希望を与えることへと変化した。「ルール」は受身的受講から集団としての能動的関与へ,「コミュニティ」は単なるFW演習のクラスの一員から他者理解を基にした協働社会へ,「成果」は高校生と保護者への深い交流,達成感などを挙げることができる。いずれも活動開始当初には思い及びもしなかった「いまだここにはないものを学ぶ」という次元の展開と考えられる⁵⁾。

また「旬の素材を取り上げる」ということは,歴史的文化的なものに脈々と連なる現在という文脈において埋め込まれた矛盾が露呈することから,拡張的学習の題材としては相応しいと考える。

(2) 2020年度コロナ禍におけるゼミの活動 ＜covid-19の影響とコミュニケーション・ツールの開発＞

2020年度は,Covid-19により入学式やいつもの新年度のガイダンスが無くなり,学生はキャンパス入構禁止となったことで,ほとんどの学生はステイ

表2 開発したコミュニケーション・ツール

アイテム	検証と豊富化
絵しりとり	時間の短縮、繋がり易い
価値観をテーマにした描画	表現法, google jamboard
製作者の予想	順番
簡単な塗り絵	題材, 色の濃さ
好きな色あて	色の濃さ
子どもの保健クイズ	なぞなぞの要素
この一曲	URL
お勧めコンビニ・スイーツ	うたい文句
季節の写真・コラージュ	フォーマット
インスタ映えスポット探し	学内情報, 探索

ホームを強いられた。前期の授業はすべて on-line 形態となり、新学期の開始もゴールデンウィーク明けの5月にずれ込んだ。3年生、4年生にとっては毎週の zoom によるゼミが唯一の交流の機会になったが、画面越しとは言え毎週のゼミを待ち望む声が多かった。キャンパスに行けない、友達と会えない、同じ空間で授業を受けられないなど、それまで当たり前であったことの喪失感があった。それでも zoom という on-line 環境のデメリットとメリットを皆で確認し合って、より効果的な文献研究や特別演習が展開できる体制を整えていった。

学科として6月に zoom による新入生歓迎会をゼミごとに行なうことになり、その準備も兼ねてゼミでコミュニケーション・ツールの開発を行った。授業時間外に及ぶことも多かったが、集中力とモチベーションの高まりがみられた。

考察：5月の新学期開始から1か月ほど on-line 授業を経験して、そのデメリットは感覚的な項目を中心にたくさん挙げられた。失われたこととして、意見交換、臨場感、温度感覚、体感、目が合う、触れ合い、質疑応答、教師の雑談、教師が熱く語る姿など非認知的要素である。またオンライン環境の不安定性、静穏な環境の確保などへの不安、課題の多さなどが挙げられた。オンデマンドのメリットは、通学時間が無い、時間に関係なく動画や資料を繰り返し視聴できるなどであった。

ゼミでは専門教育と並行して歓迎会に向けてコミュニケーション・ツールの開発のための数回のセッション(30分~60分)をエキストラで確保し、新入生を zoom で迎える準備をする中で、モチベー

ションが高まった。いろいろなアイデア群(複数の新しいモデル)の提案と、現実的制約や時間枠、zoom 環境の条件を吟味し、検証と豊富化の言説的検討が行われた(簡易的なラボラトリーの要件を満たす⁹⁾)。

表2で示したように、ゼミの活動自体が活性化され、目的意識の共有、集中力の高まり、仲間意識の向上など集団次元の変化が生じたと考えられる(コロナ禍で3年生は対面では一度も顔合わせしていない)。

ゼミで開発した zoom で実施可能なコミュニケーション・ツールの多くは「絵しりとり」「価値観をテーマにした描画表現」「製作者予想」「簡単な塗り絵」「好きな色あて」「子どもの保健など児童学科ゆかりのクイズ」など児童学科らしさが反映されていた。

新入生歓迎会では、アイスブレイキングとして「絵しりとり」「児童学科クイズ」を挟み、先輩への質問などもたくさん出た。ブレイクアウト・ルームに分かれて先輩と交流するなど、入学してから一度もキャンパスに来ていない新入生にとっても貴重な時間になったと思われる。メンバーからは zoom 画面の「名札の表記」の工夫など、新入生へのさまざまな配慮が即興で見られた。これらのことは、集団的なエージェンシーの高まりをうかがわせた。

(3) 2021年度コロナ禍における教特セミナー<1年生向けの自校教育 教特セミナー>

筆者は児童学科の1年生を対象にした教特セミナーのクラスを担当した。自校教育に関連する目標とキーワードを定めた。また自校教育を体験的に学ぶ目的で、セミナーのテーマを「創立者である成瀬仁蔵先生の理念を現代の活動に落とし込む」とした。キーワード(心理的ツール)として「想像力<imagination>」と「協働<corroboration>」の2つを掲げたがその理由は次の通りである。

コロナ禍において新入生授業の半分は対面授業で始まったものの、すぐに感染者急増(第4波)で東京に緊急事態宣言が出され、対面授業の多くが on-line に変更になったが、この状況を経験した1年生から、「孤立」、「友達作りができない」、「交流できない」といった声があがったことによる。キーワードを見出すために、第1回セミナー前に入学後1か月の段階で、1年生からの大学生活を経験して

表3 入学後1か月の時点での大学生生活の印象

- ・登校機会が少なく交友関係が広がらないため、話し合いの場があると色々な人と関わることができて良い。
- ・友達に会う機会が減ったのは悲しい。
- ・週1で学校だとあまり大学生活をしている感じがなくて寂しい。
- ・zoomであっても、同じ学科内の人と交流できる良い機会にはなると思う。
- ・対面授業が少ないのは嫌です。
- ・対面授業とオンライン授業の両方を受けてみて、やはり対面のほうがより深い学びができると感じました。
- ・この情勢下、対面授業は出来なくとも、生徒がより深い理解につながるよう、工夫した授業を行ってほしいです。
- ・online 授業も zoom などリアルタイムで行い、生徒同士の交流の場がほしいです。
- ・学校に通いたいです。
- ・なるべく zoom や teams などを活用し、そこで一方的に教わるのではなく生徒同士で考え合う時間が今後増えることを希望しています。

みでの感想を manaba で収集した。前期開始まもなく、緊急事態宣言が出たことで、通学や対面授業を受けることによる感染のリスクの不安が高まる一方で、友達と交流できないことへの不満や寂しさについての記述が多数認められた。後者の意見を表3にまとめた(タイムリーな意識調査)。

第1回セミナーと第2回セミナーでは「交流すること」を重視し対面で実施した。キャンパス、教室、大学のシステムに慣れない、友達作りができない、授業での交流ができないという事態に学生は直面していた。セミナーのメンバーは33人であり、6つのスモールグループに分けてグループ・ディスカッションや活動を行った。対面配慮を希望した学生には zoom によるハイブリッド形態を用意した。第2回セミナーには、スタートして間もないひめピアの執行部の3年生の2人にゲストとして来ていただき、短時間であったが交流していただいた。

第3回セミナーは、軽井沢セミナーを目白キャンパスの対面授業で代替することになっていたが、第5波の影響で on-line に変更になった。テーマである「成瀬仁蔵先生の理念を現代の活動に落とし込む」を実行するには、まず三綱領を一人一人が自分なり

に解釈する必要があることに気づかせ、その解釈の議論を皆と共有することから始めた。

現代的な活動の具体例として本学における学生のピアサポート制度やカウンセリングセンターの活動について考えた。ゲスト講師の北島は、三綱領の解釈の例として「信念徹底がもっとも重要であり、自分を知らうとする意志、不断の問いと検討の継続による精神的向上、自己を変え想像してゆくこと」を挙げた。成瀬語録から成瀬が大切にしたい「質問会」のことを紹介し、カウンセリングセンターの個人面談とグループセミナーに受け継がれているとした。

心理的ツールを用いた活動は、「スクイグル技法」を応用したぐるぐる制作である。「スクイグル技法」は、イギリスの小児科医であり精神分析家であるウニコットが主に診察場面で用いた子どもとのコミュニケーション・ツールである¹²⁾。

画用紙に黒のサインペンでぐるぐるを描き、ペアの学生のぐるぐるを得て、2つのぐるぐるを見てイマジネーションを働かせて、見えてきたものにクレ

表4 媒介的道具と分類試案(2021年度教特セミナー)

小グループ分け	ツール	はじめて知り合う、対面での交流、協働のサイズ
ひめピア	ツール	縦軸の交流
ハイブリッド形態	ツール	感染の不安軽減、参加しやすさ
Zoom のブレイクアウト	ツール	対話、意見交換
キーワード；想像力	心理的ツール	焦点化による思考のきっかけ
キーワード；協働	心理的ツール	活動の方向性
講演	心理的ツール	成瀬の理念の解釈の可能性
中高時代の活動報告	ツール	三綱領を現代の活動に落とし込む
Jam board	ツール	出た意見を可視化、分類
画用紙、黒のサインペン	ツール	画面越しでの見やすさ
クレヨン	ツール	多様で個性的表現
ぐるぐる	ツール	相互スクイグル法の応用
絵本製作	心理的ツール	協働における想像力の発揮
読み聞かせ	ツール	持ち味発揮、内省、自信、評価

ヨンで彩色する。ぐるぐる自体は任意の線による曖昧な図形なので、投影法の原理が働き人それぞれ見えるものが異なる。Manabaやzoom上で共有しながら、自分のペアが何を見出しどういう彩色にしたかを確認して自分との知覚の違いに驚き、イメージーションの多様性と素晴らしさを理解を導いた。

表5 ぐるぐるから絵本を協働制作した後に読み聞かせを聞いての感想

<ul style="list-style-type: none"> ・物語にはきちんと起承転結があるし、絵のクオリティも高く見ていてとても楽しかったです。 ・途中で発表が中断してしまっても、同じグループの子が助けてあげていたのも素敵だと思いました。 ・この短時間でありきたりな動物や食べ物ではなく、キャタピラーを主人公にした題材だったのが衝撃的で興味深かったです。 ・どの班もストーリーの構成がしっかりとしていて、ばらばらの絵から作ったとは思えないほどで、すごいと思いました。また、ストーリー以外にも、読む際の割り振りや、読み方の表現、パワポの工夫も班ごとに個性が出ており、班ごとでも独自性は生まれるのだと感じました。また、いもむしの絵が何枚かぶってしまっていた班がありましたが、それも逆に利用して素敵なストーリーを作っていたので、想像は無限だと感じましたし、そういった対応を皆でしていくのも共同作業の魅力なのだと思います。 ・絵本作りは最初ハードルが高いと感じたが、やってみると皆のアイデアが沢山合わさってスムーズに作れたので、一人の作業ではない、協働を実感しました。 ・どの班もストーリーの構成がしっかりといて、ばらばらの絵から作ったとは思えない。 ・ストーリー以外にも、読む際の割り振りや、読み方の表現、パワポの工夫も班ごとに個性が出ており、班ごとでも独自性は生まれるのだと感じた。 ・同じイモムシの絵が何枚か被った班がありましたが、それも逆に利用して素敵なストーリーを作っていたので想像は無限だと思った。

このワークを通して、同じ学科であってもよく知らなかったメンバーとの交流が進み、協働の活動のモチベーションが高まったため、さらにチャレンジ的な課題を実施することにした。ブレイクアウト・ルームで4人グループを作って、彩色したぐるぐる

を持ち寄って、最大8枚の絵を用いて（並べて）相談しながら物語を作る絵本作りである。絵本は児童学科の学生にとって、子どもに読み聞かせる馴染みあるものであるが、それを協働で作るのは難易度の高い課題であった。

この協働での絵本製作を総括して、協働を通して自分を知り自己を超えるという意味で「信念徹底」に結びつけたり、社会性の発達に関係するという意味で、同じく三綱領の「共同奉仕」のに繋げて考える学生が少なくなかった。

考察：画用紙に黒のサインペンでぐるぐるの線を描くことは数秒でできる単純な課題である。深く考えずに自由に描けるため防衛的な構え無しに個性が表現される。そしてペアの相手と共有しそれぞれが2つのぐるぐるから何かを発見してクレヨンで彩色する。無意味なぐるぐる模様から何かを見出すことは、ロールシャッハ・テストでインクの染みに何かを見るのと同様の知覚実験であり投影的要素が強い。

ペア同士で同一のぐるぐる模様からそれぞれ異なる独自の絵を描き上げて共有した際の感動的なコメントが印象的であった。創作的活動への好奇心と意欲が高まるタイミングで、更なる冒険として4人グループになってそれぞれが持ち寄った絵を並べて、物語を作る課題を与え絵本を創作し、読み聞かせを行った。絵本つくりと読み聞かせ後の感想から、協働の素晴らしさ、クオリティの高さ、豊かな発想、想像力は無限であること、班ごとの独自性、読み聞かせ発表時の助け合いなどが語られたが、集団次元のエージェンシーの現われと理解できる（表5）。

生活教育運動を代表する野村芳兵衛の場合は、なす（作る）ことによる学びの素材となるのが「具体的な郷土の生活」であった⁸¹。大学生にとっては、キャンパスや建物そして教師との教育場における4年間の生活が、それに相当すると考えられる。

おわりに

本稿では、集団次元の文脈変容の促進に寄与したと考えられるさまざまな媒介的道具を網羅して、ツールと心理的ツール（記号）に分類する試みを行った。まだまだ試行錯誤の段階ではあるが、この作業をする中でそもそも何が道具となるのか、その場合個々の道具がどのように機能し変化に影響を持つのか、技術的なツールの意味合いが強いのか、そ

れとも心理的ツールのように局面を動かすのかといった思索を行うことができた。作成した表は、発展途上の試案ではあるが、道具と拡張の関係の理解が得られたと考える。今後の課題として、媒介的道具の2つの階層がどのようにかみ合うかを精査する必要性が挙げられる。

大学生の協働活動において、集団次元のエンジェンシーに注目する意義は大きい。「2. 集団次元のエンジェンシーに関する研究」において、子どもや初等教育に関する研究を主に紹介したが、このレベルでの動きを引き起こす拡張的学習が生じやすいのは、実は大学生の年代である。エンゲストロームは、「現代の資本主義社会において最も高い確率で拡張的学習活動が個体発生の中に現れるのは、成人期あるいは思春期であると考える。」と述べ、その理由について「主体は、仕事、学校に通うこと、科学あるいは芸術といった自身の主導的活動の中で、歴史的で個人的に差し迫った内的矛盾に直面することになるからである」とした。

思春期、青年期、成人期への移行期間である大学生は、単純に考えても幅広い教養や専門教育があり、一方で学外実習、フィールドワーク活動、そしてアルバイトをする場合は社会の一員として身を置く。資格を取得するための学外実習では職業人と共に活動することになり、差し迫った内的矛盾に直面する機会に遭遇しやすいと考えられるのである。

とくに2020年度から2021年度にかけてのコロナ禍が、潜在的な内的矛盾を顕在化させることに関係していると考えるのが自然である。コロナ禍においては、ワクチンや治療法ができて普及されつつあるといっても、新たな変異株の出現の可能性による感染力や重症化懸念はゼロにはならない。人と触れ合い交流するというもともと人間らしい活動を奪っているという意味で心理的な影響は深刻であると言わざるを得ない。こうした目下の環境的要素を十分に考慮し、集団的な次元での活動によるキャンパスライフのパラダイムシフトが求められていると感じる。

参考文献

- 1) 吉澤一弥：小規模クラス授業の主体的な活動を促進させる要因の検討 ―フィールドワーク演習での介入例から― 日本女子大学家政学部紀要第67号, 2020年3月
- 2) エンゲストローム著, 山住勝広訳：「拡張による学習 監訳増補版」, 新曜社, 2020年
- 3) 安宅仁人：英国における子ども・若者支援行政の一元化にかんする理論的検討；core-executive論, multi-agency論にみる政策の調整と一元化の位置づけ, 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 第114号, 2011年
- 4) 白井俊：OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来 エンジェンシー, 資質・能力とカリキュラム, ミネルヴァ書房, 2020年
- 5) エンゲストローム：『拡張的学習の挑戦と可能性―いまだここにはないものを学ぶ』山住勝広監訳, 新曜社, 2018年
- 6) 小玉重夫『学力幻想』, ちくま新書, 2013年
- 7) 吉田直哉：B.バーンステインの「教育コード」理論の形成過程 - 東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学, 2012年
- 8) 山住勝広：拡張する学校, 第5章野村芳兵衛における「本を作る教育」のカリキュラム, 東京大学出版, 2017年
- 9) 吉澤一弥：第6回活動理論学会オンライン研究大会 ラウンドテーブル「パンデミックの時代における活動理論」；「コロナ問題のとりえ方と新しい活動の枠組み創り ―保育と子育て支援, 大学のonline授業の経験から―」発表資料, 2020年9月
- 10) 学園ニュース (日本女子大学)：2021年11月号
- 11) 北島歩美：「大学教育と青年期の心理的成長―大学コミュニティにおける学生相談の役割と学内連携について考える」カウンセリングセンター報告, 60周年記念号, 2018年
- 12) 白川佳代子：子どものスタイグル ウィニコットと遊び, 誠信書房, 2001年

謝辞 山住勝広先生には、第7回活動理論学会研究大会(2021年9月18日, Zoomによるオンライン開催)で多くの新知見や学問的刺激をいただきました。ここに御礼を申し上げます。